世界中のすべての人々が傷つけ合うことなくみんな幸せに、子どもと自然がのびのびと

子どもと自然学会通信

2012年10月6日発行 48 (vol.10 no.4)

Society of the Child and Nature

発行:子どもと自然学会＝日本学術会議協力学術研究団体

目次

ながの大会へのごあんない(2)
琵琶湖フローティングスクール「湖の子」(3)
『ごんぎつね』における人間の動物との関係を考える(4)
子どもと自然学会ながの大会案内ー再録(11)

第18回ながの大会

大会テーマ:「どうする自然離れ」

開催期日 2012年 11月24日(土)

(一日目の夜に理事会を開催する予定です。よろしく。)

25日(日)

開催会場:信州大学

飯縄高原・長野県環境保全研究所飯綱庁舎

1日目:一般発表/懇親会/第9回全国学生交流集会

2日目:フィールドワーク/シンポジウム/

発行:子どもと自然学会事務局 (〒611-0002 宇治市木幡平尾27-480 生源寺孝浩 shogenji@m5.kcn.ne.jp)

子どもと自然学会第１８回

ながの大会へのご案内

「自然離れ！」は本学会において中心的な課題でもあります。そこで今大会のテーマを「どうする（子どもたちの）自然離れ！」として設定し、どうすれば子どもたちに豊かな自然体験を提供できるのか、皆さんと考えてゆきたいと考えました。その切り口として「子どもの自然体験を促す方法～学校での遠足の意義」をおいてみました。

ほぼすべての児童が体験する遠足は、子どもの自然体験としてはまことに貴重な場ですが、その意義やあるべき姿については意外と研究されていないようです。各世代、各地域、各学校で遠足がどのような目的で、どのようにおこなわれ、どのような成果をみせているのか、などについて意見交換と討論がおこなわれ、好ましい遠足の在り方を提案できればと思います。

ながの大会は参加者は70名（学生40、一般30）、発表47本と盛況です。

長野は急速に秋が深まり、リンゴが真っ赤に色づいてきました。大会の11月24-25日にはかなり寒くなります。特に25日のフィールドワークは標高1000mの飯縄高原ですので、防寒着が必要です、暖かい服装でおいでください。寒さ対策をよろしくお願いします。

シンポジウムのテーマ、演者は以下のように確定しました。ご期待ください。

テーマ「子どもの自然体験を促す方法ー学校での遠足の意味」
25日1300より　長野県環境保全研究所にて
パネラー：三上周治（イベントからの脱却。学びのある遠足へ！）
内田幸一（幼児の日常と遠足）
塚田博之（長野県における学校登山の概要）
大西　浩（高校における学校登山）
長野西高生徒（小中の学校登山から高校山岳班へ）
皆さまの学校現場の遠足の現状や課題を持ち寄り、討論しましょう。

ながの大会にお待ちしております。

大会の11月24-25日にはかなり寒くなります。特に25日のフィールドワークは標高1000mの飯縄高原ですので、防寒着が必要です、暖かい服装でおいでください。寒さ対策をよろしくお願いします。

びわ湖フローティングスクール「湖の子（うみのこ）」

京都橘大学４回生　尾田美紀

琵琶湖フローティングスクールは1983年(昭和58年)から本格的な航海を始めました。就航してから平成24年10月17日現在で464.685人の児童が乗船しています。

教育方針を、「学校教育の一環として滋賀県内の小学5年生を対象に、母なる湖・琵琶湖を舞台にして、学習船「うみのこ」を使った宿泊体験型の教育を展開し、環境に主体的にかかわる力や人と豊かにかかわる力をはぐくむ。」としています。

教育内容には「びわ湖環境学習」と「ふれあい体験学習」の二つの領域があります。「びわ湖環境学習」では水質調べ（汚れ、北湖と南湖の透明度の違い）やプランクトンウォッチング、カッター活動をします。他にも、水草しおり作りやロープワーク、しじみのストラップ作りなどがあります。これらの活動の中から学校の先生が選択したものを実施します。「ふれあい体験学習」では、長浜タウンウォクラリーや、夜の集いでの学校紹介や綱引きなどを行います。

「湖の子」は、いくつかの学校が一緒になって活動します。小規模校の場合は５校もの児童が一緒に活動します。班編成もいくつかの学校の児童と関われるように考えているので、初めはぎこちないですが、徐々に仲良くなっていきます。先生方も連携して計画を立て、当日も協力して動かなければならいのが大変そうですが、見ていてとてもいいなと思います。

私は、「湖の子サポーター」として何度か１泊２日で参加したり、びわ湖環境学習の補助をしてきました。

子どもたちはとても元気で、ほとんどの子どもが隙間時間にはトランプをしたり、取っ組み合って遊んでいます。しかし、放送をよく聞いて廊下に整列したり、係の仕事をしたりしています。カッター活動や長浜タウンウォークラリーの時だけ、地上に出ることになるので、走り回っている子どもが多いです。クイズに答えながら、みんなでゴールを目指します。子どもたちが仲良くなると特に感じる場面は、夜の集いでの綱引き大会です。反対抗で行います。全員が力を出し、協力して盛り上がることができるので、とても楽しい雰囲気です。「湖の子サポーター」として参加する私にとって、誰一人知っている児童がおらず、うまく関われるか毎回不安に思っていますが、「湖の子」という普段とは違う環境が、人と話しやすい環境を作ってくれているように感じます。そして、学校の先生や「湖の子」の先生が支えてくださり、毎回学校のカラーがうかがえるそれぞれの「湖の子」を体験しています。

『ごんぎつね』における人間と動物との関係を考える*1

岩田　好宏

1．はじめに一問題意識

子ども向け文芸書である『ごんぎつね』は、これまで父母、教師などの強い支持を受け、子どもたちに長く読みつがれ、学校の授業で取り上げられてきました。これは、新美南吉が書き、鈴木三重吉が一部書き換え、1932年、雑誌『赤い鳥』に発表されたものです。そうした文芸・教育的評価とは別に、キツネという動物が主人公となっていることから、人間と動物との関係から関心をもちました。子どもたちが、この本を読んで、あるいは読んでいるのを聞くことによって、キツネについてどのような印象をもつか、どのようなキツネ像を描くかということに関心をもちました。

『ごんぎつね』を読んで、私が最初にもった印象は、ごんぎつねにキツネが感じられなかったわけではありませんが、「いたずらっ子物語」とちがわないということでした。

＊1 人間学研究所教育的人間学部会例会での発表とその時配布した資料をもとに書きました。

2．方法

そこで、藤沢周平の「時代小説」で試みてきたことと似たことをしてみました。時代物を現代小説に書き換えて、その差異をみるという手法です。文章はできるだけ原文のままにして、江戸期の場面や台詞を現代風になおすという手法を採りました。書き換えれば、当然のことながら、表現されている文芸的世界に大きなちがいが生まれます。こうした手法を採った理由は、書き換えによって現代小説として、出来不出来は別にして成り立たせ、そのことによって、現代におけることを、場面を江戸期におきかえて書いたものか、それとも文芸的に創作するにあたって、できるだけ江戸期の世界（社会、自然）をうつし出すということを強く意識したかどうかをみるということでした。

たとえば、藤沢周平の、『竹光始末』の場合、これは、藩の取り潰しで浪人となった下級武士家族が、紹介状をたよりに、ある藩の物頭に面会を求めるところから始まります。妻の美しさと、ぼろをまといながらも気品ある家族の姿を妻から聞き、心を動かしたその物頭から、上意討ちをもちかけられ、役目を果たして家禄を得るという短編小説です。これは、企業倒産によって職を失った男が家族を連れて職探しに出る。たまたま知人から紹介された企業で技能・能力コンテストが開催され、そこで優勝して就職するというように、現代物に書き換えることは不可能ではありません。しかし、ほとんど全部書き換えないと現代小説にはなりません。

藤沢作品の中には、『山姥橋夜五ツ』のように、原文をできるだけ変えないで、江戸詰めのかわりに単身赴任、子どもの剣道

の稽古のかわりにサッカー練習、藩の公金横領を企業資産の流用にかえるというように一部を換えただけで、現代のものがたりが成り立つというものもあります。暗殺の手段は、斬殺にかえて毒殺・ビル屋上から突き落とすなどさまざまなものが考えられます。ただし、『麦屋町昼下り』のように、部分的になおすだけで現代物にかえることができても、切りあい、奇妙な稽古の中で独特の剣法を身につけていく場面が重要なものでは、作品としてはまったく別ものになるものもあります。それは、こうしたことがその作品の主題となっているからです。

『ごんぎつね』についても、できるだけ原文を残しながら、変更したらキツネとしての特性が失われる、キツネのからだ、生活のしかた、環境についての記述を探し、それを農村の子どものものにおきかえるという方法を採用しました。

3．書き換えた結果

書き換えとその結果から３とおりのもの（以下「３分類」と略す）が想定されます。

A. 書き換えを全面的に行う→作品として別のものになる

a. 書き換えを一部に限って行う

a1. 書き換え部分が主題となっている→作品として別のものになる

a2. 書き換え部分が主題となっていない→作品として大きな変化はみられない

『ごんぎつね』の場合、この方法により変更した語はつぎの４つだけでした。これによって、『ごんぎつね』はキツネの昔話ではなくなり、1950年代以前における農村といたずらっ子のものがたりに転換できたと思っています。題名も『いたずらこぞう、ごん』、あるいは『ごんとよばれた子』ということになります。上の「３分類」ではaになりました。

a. きつね→こども

b. ごんぎつね→ごん（呼称）

c. ほら穴・あな→朽ちかけた炭焼き小屋、または炭焼き小屋小屋

d. 頭をびくにつっこんで→地面にびくをひっくりかえして

4．考察—何がわかり何を考えたか—

4·1. 『ごんぎつね』から形成されるキツネ像

わずか４語の変更で「キツネ物語」から「いたずらこぞうの話」にかわるというようなことは、藤沢周平の時代小説にはないことです。それほどに、藤沢周平は、江戸期の武士、あるいは町人の生活を克明に描いております。時代ものに欠くことのできないものの一つとして、現実感と考えていたのでしょう。また読者は江戸期特有の人間模様とここに惹かれるのだろうと思います。

『ごんぎつね』は、言い換えますと、読んで「ごんぎつね」がキツネであるとみる根拠は、この４つの語しかないということです。その中でキツネの生活の様子を描写するのに使われている語は、あなの中にかくれていることと、ウナギのとらえかたの２つです。この２つがないと、この本からキツネがどのような動物か、どのような生

活をしているかを知ることはできません。キツネの実像からみますと、それほどに現実感に乏しいものであると思いました。しかし、昔話は、短いことを旨としておりましたから、こうしたことはよくみられることではないかと考えます。

4･2.『ごんぎつね』はキツネ物語か

わずかな語句の変更で「キツネものがたり」から「いたずらこぞうの話」に変えられ、残りの大部分の記述は、どのようなことを表現しているかといいますと、ほとんど人間のことです。人間の子の行動、思ったこと、悲しんだこと、考えたことと同じです。

つぎに、「３分類」のaのうち、a1か、それともa2かということを考えてみました。もし、この子ども向け文芸書がキツネ物語とみますと、当然のことながらa1になります。キツネが主題ではないとするとa2になります。ところが、こうした分類とは別に、つぎのようなものも考えられます。むしろ、出てきた結果を考察して、結論を出すという手順からすれば、この方が本来の分類となります。

a. 書き換えを一部に限って行う

a1. 作品として別のものになったので→書き換え部分が主題となっている

a2. 作品として大きな変化はみられなかったので→ほかの大部分に主題となる記述がある

キツネ物語であったものがキツネに関することを書き換えれば、キツネ物語でなくなるというのは、至極当たり前のことです。キツネに関することを書き換えても、作品として大きな変化がないと判断された場合には、この作品は、キツネ物語ではなく、ほかのことを主題にした物語であり、その主題についての記述はほかのところに書いてあると考えることになります。私の判断はa1でした。しかし、『ごんぎつね』を読んだあと書き換えを読んで、大きく変わっていないと判断する人もいるでしょう。そういう人は、この本の大事なところをキツネとしないで、ほかのところ、たとえば、いたずらをして、その被害にあった人の様子をみて改心するところを主題としてとらえていたということになります。

『ごんぎつね』を読む授業の実践報告や指導法のいくつかを見ましたが、それらから受ける印象は、私とはちがったものでした。子どもたちの読む焦点を、他者の身になってものをとらえ、行動するという倫理に焦点をあてた実践であり、指導法でした。

4･3. 事実の解釈をめぐって

ところが、aの分類のしかたには、もう一つのものがあります。

a. 書き換えを一部に限って行う

a1. 主題となっている部分が書き換えられた→作品として別のものになった

a2. 主題となっている部分が書き換えられていなかったので→作品として大きな変化はみられない

a3. 書き換えで消えた主題もあるが、残った主題もある

このように分類しますと、a3と判断する人もいることが予想されます。あなにかく

れる、ウナギを口でくわえるだけでなく、キツネはいたずらをする、その結果人間が困るのをみて反省し、その人の身になって善行をするというように、キツネを見ている人にとっては、主題となることの一部しか書き換えられず、大事な部分が変更されずに残ったと判断するのではないでしょうか。私のように、４語を書き換えることによってキツネについての記述を抹消したと考えたのは、キツネには「思う、考える、反省する、善行をする」などないというキツネ像が根拠になっているからです。

これと同じことを、藤田嗣治の戦争画について述べたことがあります。かつて朝日新聞夕刊で、加藤周一が藤田の戦争画を取りあげ、藤田には戦争協力の意志はなかったという意味のことを書かれたことがあります。私の文はそれにふれながら、あたかも事実そのものを写し取ったかのようにみえる迫力ある写実作品は、見る人の視点のちがいによって異なる評価をされる。戦争中は、多くの人が戦争を支持していたから戦意高揚の作品と受け取られ、敗戦後は反戦の画とみられました。私は、事実にはそういう面をもっていると書きました（雑誌『子どもと教育』所収）。ところが、その後、2012年8月26日、NHKテレビは、藤田の戦争画を特集としてとりあげ、藤田は、敗戦と同時に、戦争画の日本字で書いてあったサインに、アルファベットのサインを付け加えたという消息を知らせてくれました。藤田自身が、自分の描いた絵を戦中の戦意高揚から戦後の反戦の絵に変えられると考えたようです。それが戦時中に考えたことであるならば、藤田という人は、桁外れの歴史感覚をもっていたとみることができます。

『ごんぎつね』は、キツネを主人公にした、キツネと村人の心の交流を主題にした物語のようです。ものがたりの進行をみますと、前半の大部分は、ごんぎつねの立場から、ごんぎつねが何を考え、何を思い、何をしたかが書かれています。はじめに悪さをするだけのいたずらぎつねの姿が描かれ、やがて兵十の妻の葬式を見て改心する。さらに兵十のためになることをする。しかし、善意でしたことが兵十にとっては迷惑であることに気づき、別のことをするというように語られています。そして、最終の場面の、“そのとき、兵十はふと顔をあげました。”からは、兵十の立場に立って書かれ、ものがたりは大転換して終わります。

ですから、この本を読んで、子どもたちは、それぞれによって異なるとらえかたをする可能性があると思っています。キツネについてまったくの知識をもっていない子、両親や年寄りなどを通じて、キツネの嫁入りや人に「成り済ます」の昔語り、神様のお使いであるなどについて聞いている子、動物園でキツネを見たり、テレビの映像を通じてキツネの生活の実像を知っている子では異なるとらえかたをすると思います。

多くの人から聞く『ごんぎつね』を読んで、子どもたちのいだく第１印象は、「ごんは可哀想」であり、キツネの子は、いたずらをし、それがいけないことであることに気づき、心を改め、他人に役立つことをしてやさしい」などです。キツネの子と心のやさしいいたずらっ子の姿が重なってキ

ツネ像が描かれるようです。

4·4. 書き換えて重大な問題が発生

ところが、この「キツネ物語」から「いたずらこぞう話」への転換で、書き換えが難しい場面が1か所あります。キツネを子どもにおきかえたことによって、重大な問題が発生します。それは、最後の場面ですが、ごんぎつねを鉄砲で撃ち殺すところで、おきかえますと、兵十はいたずらっ子であることを知りながら、鉄砲で殺してしまうことになります。殺人を犯したことになります。もし人間の子どもであるならば、「つかまえて、どこかに縛り付け、折檻して解き放す」程度に留めざるをえないと思います。しかし、それではありふれた話になり、ごんぎつねに特別な想いをもたせるほどの衝撃をあたえることにはないと思います。キツネだからこそ殺すことができ、殺すことによってとりかえしのつかない事態に追い込んで、そこで兵十のごんぎつねに対する誤解がいかに重大なものであったかを問うことになります。キツネであることにより、殺し、そして善行であったことを知ることにより、惜しみ、悔やむという劇的な場面で終わりにすることができたわけです。

ウィキペディアの『ごん狐』は、作者の新美南吉が下敷きにした口伝では、「兵十の母の葬式を見て、悪さをしなくなりましたというところで終わり、撃たれておらず、それ以降の展開は南吉の創作したものではないかともいわれている」と書いています。

4·5. 人間、自分をみる

ここには、動物のみかたとして重大な問題があります。キツネであれば、悪さをした場合には殺してもよい。しかし、よいことをしたキツネの場合にはそうはいかないという動物についての倫理観がみられます。

これには、人間にとって有害なものであれば殺してもよい、有益なものならば温存するという考え方がみられます。つまり、人間中心の動物像であり、動物をそのものとしてとらえ、人間の立場からではなく、その動物の立場に立って、どのように対応するかという視点がありません。人間も自然の一部、動物の1種とみるのと、動物も人間と同じとみるのでは、見方がちがいます。人間も自然という見方を、日本人の自然の見方のすばらしさと言われている人がいます。しかし、そこに、自然は人間と同じというとらえかたが潜んでいるのではないでしょうか。自然にどのように対するかという時に大事なのは、人間は特別の存在であるとみるべきであるということだと思います。それは、人間を自然を超越したものという「特別」ではありません。それは、人間が自然にはたらきかける時に発揮される自然力の強大さにあります。原子核エネルギーの利用がその最たるものです。人間が狂えば、地球の今の自然が破滅するほどの自然力を所有しているという「特別」です。農耕以後、人間は他の生物にとっては脅威の生きものとなりました。

「人間も自然である」ということのもっとも重要な意味は、そのことを無視して人間は存在できないということにあると思います。人間の生きかたを考える時に、自分が自然的存在であることを自覚しなければ

ならないということだと思います。

「キツネは人間ではないが人間みたいだ」というのが、『ごんぎつね』にみられるキツネ像だと思います。こうしたキツネ像を基礎にして著すことのできる物語としては、現代においては「昔話」の形態しかないと考えております。キツネには、人間の心とおなじものはなく、考え、思い、悩み、悔いる、人間的な善行をするというような、精神活動はみられないというのが常識です。前でふれましたが、子どもが「キツネは人間を化かす」、「人間に化ける」と考えているとしたら、それはそういうとらえかたを、本やテレビ、あるいはおとなから話として教えてもらったからです。現代においては人間とキツネとの交流は、特別の地域を除けば希薄になっていますから、キツネについての知識はほとんどないとみてよいのではないでしょうか。私自身も実際のキツネとの出会いは動物園の中と、北海道旅行の時だけです。そのほかの知識は映像や書物によるものです。私たちが、キツネに対して、ほかの動物に対してとは異なる、『ごんぎつね』にみられるような、特別の思い、あるいは偏見をもっているとしたら、それは昔話など伝承に強く影響を受けたものであると考えております。

著者の新美南吉自身、この自身が『ごんぎつね』の中で示した「キツネ」像を肯定していたかどうかはわかりません。その書き出しは、“これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話です。”となっています。このものがたりの主題は、江戸期から続く昔の農民の「キツネ」像であると思います。昔であっても、ごんぎつねのようなキツネが、またごんぎつねと兵十との関係のような、キツネと人間の関係が実際にあったわけではありません。しかし、こうしたキツネ像は、農民の生活と歴史の中で生まれたものです。この関係を無視して、昔話にみられるようなキツネを語ることは避けねばならないと考えています。しかし、ウィキペディアによれば、新美も鈴木三重吉も、近代の目で改作しています。それが創作文芸であるといえば、それまでですが、相手は子どもです。おとなによって動物に対するみかたがゆがめられるとしたら、それはどこかで修正できる機会を、おとなは用意しなければなりません。昔話としてであるならば、昔の人の生活、キツネその他の動物との交流の中で生まれたものであるという、動物思想史として教えられます。

たぶん、つぎのようなことから、昔話にみられるような、キツネ像が生まれたのではないかと考えます。

a. 村の中には、「だれがしたのか」あるいは「何が原因になっているのか」わからない事柄がおこる

b. キツネは人間に近いところに生活しているが、家畜やその他の動物とはちがって、不可解な動物である

c. キツネは時には農作物などをぬすんで、有害な動物である

これは、古代における神話的自然像の生まれ方と似ているのではないかと思っています。

「自然には、人間の目的意識をもとにしてつくられた理とは異なる理があって、自然はそれに則して存在している。それは、

人間の知識や理を超えた面があり、それに人間はしたがわざるをえない。その理は自然をこえたものの目的意識によってつくられた理である」

同じようにキツネを主題にした、子ども向け文芸作品として、佐藤さとる*2の『きつね三吉』というのがあります。その最後はつぎのようです。

“むかしのきつねのなかには、人間にばけたまま、りっぱな一生をおくるものがあったそうです。人間のおよめさんをもらい、子どもをそだて、人間よりもまともにくらしたきつねがときどきいたそうです。たとえば、この話にでてきた茂平おやかたがそうでした。”

これは、現実にこうしたことがあったわけでなく、作者佐藤さとるのキツネ像から生まれたものです。しかし、佐藤さとるの場合には重大な問題があります。『ごんぎつね』のように実際に残っていた昔話をもとにはせず、作品の最後に、前掲の引用文を付け加えることによって、実際にあったかのように語っています。

＊2 1928年、神奈川県横須賀市生まれ、　本名は佐藤暁（さとる）。ファンタジーの世界を　えがいて第一人者といわれ、『誰も知ら　ない小さな国』（講談社）は日本の児童　文学に新時代を開いた作品と評価されて　いる。幼年童話に、『おばあさんのひこ　うき』（小峰書店）、『海へいった赤んぼ　大将』（あかね書房）、『マコトくんとふ　しぎないす』（偕成社）などがある。（佐　藤さとる著『きつね三吉』（大日本図書、　1969年発行）の著者紹介より）

5．おわりに—倫理学習指導として『ごんぎつね』は適当か

『ごんぎつね』には、倫理学習指導をする場合に重要な意味があります。ごんぎつねが、兵十の妻の葬式の場面で、自分がよいと思っていたことがそうではなかったことに気づく場面です。他者意識の形成です。これに対して、兵十は、ごんぎつねの行動とその意味を十分理解することなく殺してしまいます。倫理の問題としては、人間である兵十はごんぎつねの倫理観にまでは到達していないということになります。しかも鉄砲という強力な自然力がそれに関係して行使されて、いのちを奪うというとりかえしのつかないことをしています。しかし、こうした倫理観の形成は、キツネ物語でなくても可能です。

私は、文芸作品の解釈だけは高校時代に「いやというほど」教えられてきました。また、幸いにも高校時代に日本近代文学史の授業を受けました。それは、作品鑑賞とは異なる、文芸作品の成立を、作者の生活、思想、社会的・自然的環境、個人・家族・地域・国・世界、歴史などとの関係の中でとらえるという視点を学びました。しかし、文芸鑑賞の指導をしたことがありませんし、文芸鑑賞はどうあるべきかについてはまったく教育を受けておりません。ですから、ここで述べましたことは、文芸教育としての課題に応えるというのではなく、人間と動物のありかたという、自然学習指導の問題として考えるにとどめました。多くの方のご批判をお願いします。とくに、小学校の先生をされたことがある方は一度ならず『ごんぎつね』の学習指導をされていると思いますので、ぜひご意見をお願い致します。

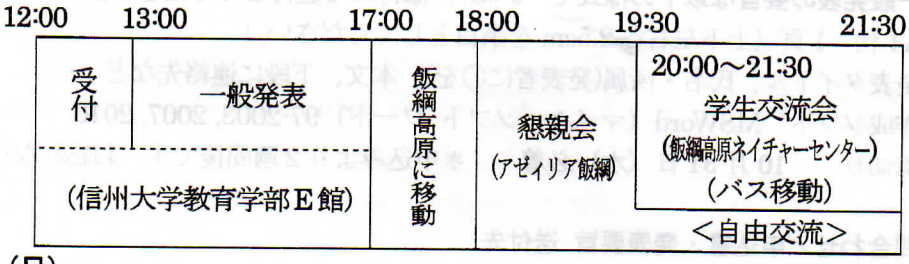
子どもと自然学会第18回ながの大会案内ー再録

テーマ「どうする　自然離れ！」

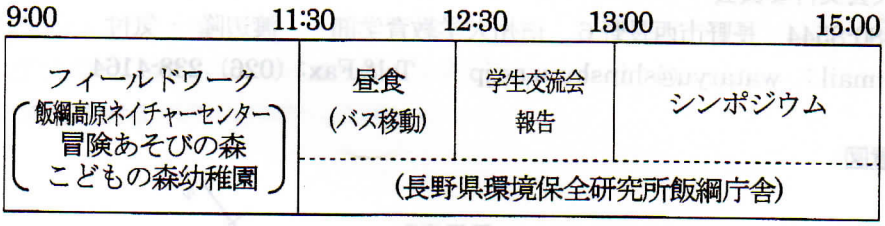
信州の美しい自然が見捨てられてゆく現状とその豊かな自然を子どもたちの育ちに活用している事例など、人と自然とを結ぶ活動の実際を信州の現場で見ていただきます。また、各地の事例から学びつつ、これからの子どもと自然のありようを考え、討論します。

■期日　2012年11月24日（土）・25日（日）　タイムテーブル

11月24日（土）



11月25日（日）



■会場・内容案内

24日　**一般発表**：信州大学教育学部E館（〒380-8544　長野市西長野6）

一般宿泊・懇親会：アゼィリア飯綱（〒380-0888　長野市上ヶ屋2471-79）
Tel.（026）239-2522

学生交流会・学生宿泊：飯綱高原ネイチャーセンター
（〒381-0074　長野市中曽根2124-161）Tel.（026）239-3301

25日　**フィールドワーク**：飯綱高原ネイチャーセンター・冒険あそびの森・こどもの森幼稚園
＊冒険あそびの森で小学生40名の活動の様子を見学し、意見交換をします。
＊こどもの森幼稚園は休日ですが、施設の様子と活動理念など紹介いただきます。

シンポジウム：長野県環境保全研究所飯綱庁舎（〒381-0075長野市北郷2054-120）
＊テーマ「子どもの自然体験を促す方法～学校登山の意味（仮）」を予定

会場へのアクセス（公共交通機関）

・信州大学教育学部へは、JR長野駅善光寺口からバス約10分「信大教育学部前」下車
（市内循環バス「ぐるりん号」　各時間帯　10・30・50分長野駅前発）

＊アゼィリア飯綱と飯綱高原ネイチャーセンター宿泊者；会場間の移動に無料バスを利用できます。25日シンポジウム後も、JR長野駅まで無料バスでお送りします。

■**参加申込**：各自（1名ごとに）申込書で**10月17日（水）必着**にてお申込みください。

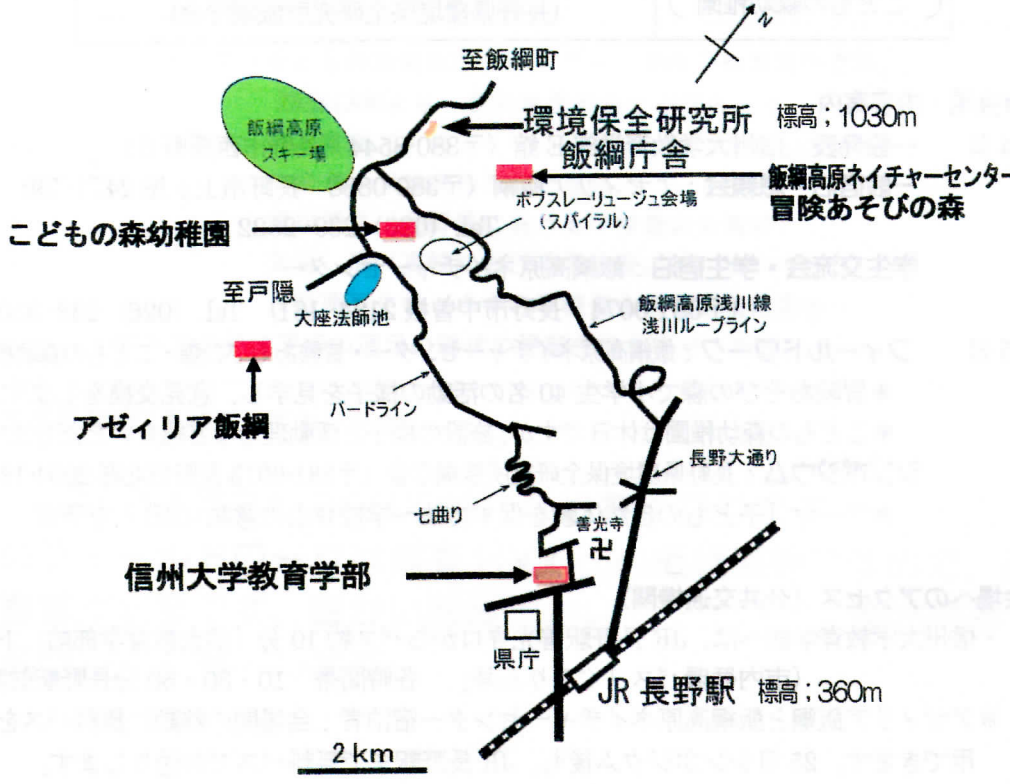
■**費　用**：　当日受付でお支払いください。おつりが無いようご協力ください。

・大会参加費	一般	1,000円	学生	500円
・懇親会（宿泊有）	一般	9,000円	学生	6,000円
・懇親会（宿泊無）		3,500円		
・25日の昼食		600円	＊付近にはコンビニや食堂はありません。	

■**一般発表の要旨は以下の様式で　e-mail 添付にて送付してください。**

・A4判　1頁（上下左右各2.5cmを余白としてください。）
・発表タイトル、氏名・所属(発表者に○を)、本文、下段に連絡先など
・作成ソフト　MSWord（マイクロソフト ワード）97-2003, 2007, 2010
・締切り　**10月31日（水）必着**　＊申込みより2週間後です。お忘れなく！

■**問合わせ／申込書・発表要旨 送付先**

ながの大会実行委員会
〒380-8544　長野市西長野6　信州大学教育学部　渡辺隆一 気付
e-mail：　wataryu@shinshu-u.ac.jp　Tel&Fax:（026）238-4164

■**会場位置図**